

談話レベルからみた「すみません」と「ありがとう」

— 日本語母語話者と台湾人学習者との比較を通して —

郭 碧 蘭

キーワード：ストラテジー，談話，ポライトネス，すみません，語用論的転移

0. はじめに

不満表明という言語行為にはいろいろなストラテジーがあると考えられる。その中で、特に聞き手に働きかけの強い「改善要求ストラテジー」において、どのような発話の連鎖がなされているかを知ることによって、日本語学習者にみられる談話レベル上の問題を解決し、言語運用能力を促進するための有用な示唆を提示することができる。それと同時に、相手へのフェイス (face)⁽¹⁾ 侵害度を如何に軽減するかはポライトネス (politeness)⁽²⁾ にかかわるものであり、なおかつ人間関係を調整する上で、不可欠なものであるとされる。しかし、国・文化によって相手のネガティブ・フェイス (negative face) かポジティブ・フェイス (positive face) のどちらの面を重視して発話をするか、そしてどのような違いがあるのか常に語用論上の問題として現れる。

そのため、本稿では、学習者の改善要求ストラテジーの言語表現と語用論的転移 (pragmatic transfer)⁽³⁾ に焦点を当て、母語話者の傾向と比較し、両者間の類似点及び相違点を明らかにすることを目的とする。

1. 研究課題

本稿では以下の3点を研究課題とする。

- ① 改善要求ストラテジーの発話連鎖について、母語話者と学習者との間でどのような類似点及び相違点があるか。
- ② 学習者の母語による語用論的転移が談話レベル上にどのように現れるか。
- ③ ポライトネス・ストラテジーについて、母語話者と学習者とでどのような違いがあるか。

2. 調査概要

2.1 協力者

2.1.1 日本語母語話者 (Native Speakers of the Japanese language : JJ)

日本語母語話者は外国語学部の大学1, 2年生及び言語学を専門とする大学院生である。男性38名・女性58名の計96名であり, 平均年齢は学部生19.03歳(標準偏差0.80歳)・院生28.26歳(標準偏差5.23歳)である。

2.1.2 台湾人日本語学習者 (Taiwanese Learners of the Japanese language : TJ)

台湾人学習者は日本語を専攻として在籍中の応用日本語学科大学生計125名である。そのうち, 2年生43名・3年生41名・4年生41名で, 男性29名・女性96名である。平均年齢22.02歳(標準偏差1.55歳)である。

2.2 期日・場所

日本語母語話者の場合は, 2006年6月から7月にかけての2か月間, 千葉県にある私立大学で調査を行った。

台湾人学習者の場合は, 2006年3月26日から31日にかけて, 台湾台北市内にある某4年制私立技術大学で調査を行った。

2.3 調査方法

本研究は量的な分析を行うため, 大量のデータを入手することが可能で, なおかつ変数のコントロールができるように, 談話完成テスト(Discourse Completion Test)を用いて, 20場面に対する発話調査を行った。談話完成テストはいわゆるアンケート形式の調査で, 場面を設定し, それぞれの場面でどう言うかを被験者に書き込んでもらうものである。

2.4 分析資料

本稿では各調査場面の中で, 特に聞き手に働きかける力の強い「改善要求ストラテジー」において, どのような発話の連鎖がなされているかに焦点を当て, 分析・考察する。次は, 分析に取り上げた調査場面である。

あなたは寮に住んでいる。放課後、自分の部屋でレポートを書いているが、隣の部屋の人がうるさい。以前にも同じことがあった。隣の人はあなたと同性である。

あなたはその隣の部屋の人にどう言いますか？ また、どのように非難しますか？

a. 相手は親しいクラスメートの場合

(実際に言うように書き込んでください)

b. 相手は親しくないクラスメートの場合

(実際に言うように書き込んでください)

2.5 分析方法

2.5.1 コーディング

本稿では、意味・機能分類により、「ねえ」、「ごめん」、「すみません」などの呼びかけ表現や前置き表現を、「断り表現」とし、改善要求の動詞が使われる場合、それを「命題」とみて、さらに、発話文の最後に来る「ごめん(なさい)(ね)」、「すみません」などのお詫びのことばを「陳謝」の表現とし、そして、「ありがとう」のようなお礼のことばを「感謝」の表現と捉え、それぞれコーディングを行い、分析する⁽⁴⁾。次はJJとTJの発話例である⁽⁵⁾。

- | | | | |
|---|------|----------|----|
| ・ <u>ごめん、今日だけちょっとしずかにしてもらってもいい？</u> 悪いネ。(JJ) | | | |
| 断り表現 | | 命題(改善要求) | 陳謝 |
| ・ <u>ちょっと…すみませんが、しずかくださいませんか。</u> <u>ありがとうございます。</u> (TJ) | | | |
| 断り表現 | 断り表現 | 命題(改善要求) | 感謝 |

2.5.2 多変量解析コレスポンデンス (Correspondence Analysis)

多変量解析コレスポンデンスとは、集計済みのクロス集計結果を使って、行の要素(クロス集計という表頭にある項目)と列の要素(表側)を使い、それらの相関関係が最大になるように数量化して、その行の要素と、列の要素を多次元空間(散布図)に表現するものである。コレスポンデンス分析では、類似した項目を近くに配置し、類似していない項目は遠くに配置するという計算が行われる。マップ上にプロットした点同士の距離を見ることによって、関係の強弱を視覚的に把握することができ、変数間の差や類似性を同時に検証できるため、本研究ではこの分析手法によって考察を行う。

3. 結果

3.1 発話の連鎖 — 単純集計結果 —

調査結果から得られた発話文をもとに、発話の連鎖について、「断り表現」、「命題」、「陳謝／感謝」の三つに分類し集計した。その結果、この連鎖の一部がみられた発話文総数は JJ が 89 文と TJ が 150 文である。表 1 は意味機能別の JJ と TJ の発話連鎖の単純集計結果である。図 1 は表 1 を図示したものである。

表 1 JJ と TJ の発話連鎖の頻度・意味機能別

		断り表現		命題		陳謝	感謝	なし
		あり	なし	あり	なし			
母語話者 (JJ)	頻度	36	53	87	2	2	0	87
	割合 (%)	40	60	98	2	2	0	98
学習者 (TJ)	頻度	47	103	144	6	2	5	143
	割合 (%)	31	69	96	4	1	3	95

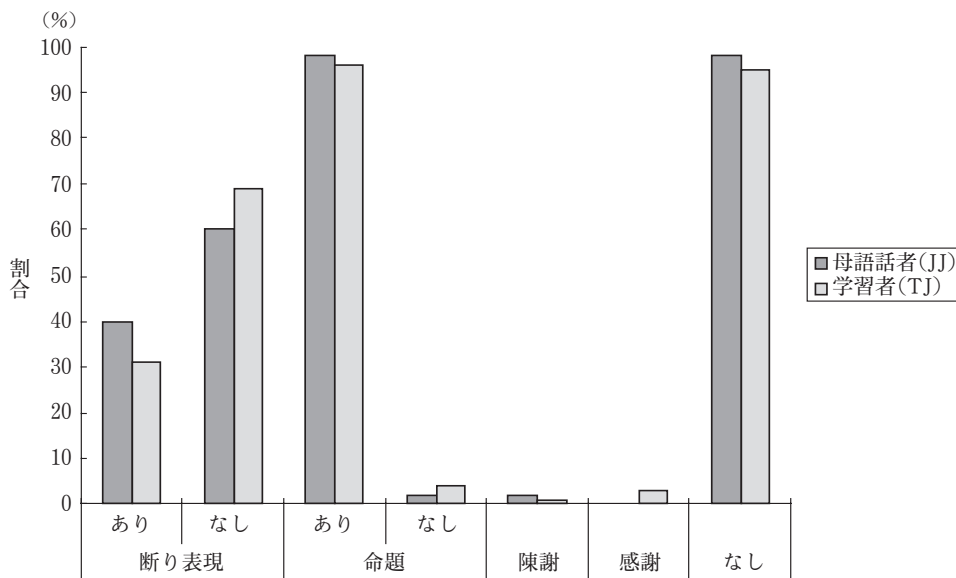


図 1 JJ と TJ の発話連鎖の割合・意味機能別

表 1 を意味機能別にみると、JJ と TJ による改善要求ストラテジー、「断り表現」、「命題 (改善要求)」、「陳謝／感謝」などの使用の有無について、次のような結果が出た。

- ・「断り表現」の有無：JJ と TJ の両方とも使わない方が多い。
- ・「命題」の有無：JJ と TJ の両方とも使う方が多い。
- ・「陳謝／感謝」の有無：JJ と TJ の両方とも使わない方が多い。

- ・「陳謝」か「感謝」のどちらかの使用：「陳謝」の使用は JJ>TJ であり、「感謝」の使用は JJ<TJ である。

このように、「断り表現」と「命題（改善要求）」では JJ と TJ が同じ傾向にあり、「陳謝／感謝」では JJ と TJ が異なる傾向にあることがわかる。

次に、JJ と TJ の差異は統計的に有意であるか否かを検討するため、 χ^2 検定を行い、その有意差を検討した。その結果、「断り表現」使用の有無に JJ と TJ とでは有意差はみられなかった ($\chi^2_{(1)} = 2.048, n.s.$)。「命題」使用の有無に JJ と TJ とでは有意差はみられなかった ($\chi^2_{(1)} = 0.562, n.s.$)。「陳謝／感謝」使用の有無に JJ と TJ とでは有意であった ($\chi^2_{(1)} = 4.962, p < .10$)。

このことから、発話の連鎖において、JJ と TJ とでは談話の前半の「断り表現」と「命題（改善要求）」の使用の有無について同じ傾向があるのに対し、後半の「陳謝／感謝」の使用の有無に異なる傾向があると考えられよう。つまり、「命題（改善要求）」のあとに、「陳謝」または「感謝」の表現を付け加えるか否かの点で、JJ と TJ とでは差があるといえよう。

3.2 発話の連鎖の傾向 — 多変量解析による分析 —

次に、話者別に改善要求ストラテジーにおける発話連鎖の傾向について検討する。なお、調査場面では、相手との親疎関係によって発話がどのようになされるかという設問があるため、以下の分析では「親疎関係」という要素も取り入れ、併せて考察する。

3.2.1 母語話者の場合

母語話者の改善要求ストラテジーの非連続的なデータをコーディングし、それに基づいて数量化したものは図 2 の示す通りである。

母語話者の発話連鎖の傾向は以下のようなものである。「断り表現」は疎の関係の場合では、より多く使われるのに対し、親の関係の場合では、あまり使われない傾向がみられる（実線で囲んだ部分）。よって、「断り表現」は相手との親疎関係に関連がある可能性が高いと考えられる。つまり、断り表現は疎の関係において、より重要であると母語話者が考えているといえよう。また、「命題」の使用は原点の近くにプロットしていることから、命題は改善要求ストラテジーにおいては必ずといってよいぐらい必要な機能として働いているといえよう。一方、「陳謝」の使用と「命題」の不使用に関して、マップ上はその他の項目からかけ離れているため、この 2 つは特殊であると考えられよう。以上分析した結果から、母語話者の発話の連鎖では、相手との親疎関係によって「断り表現」の有無が左右され、「命題」があまり影響されず一般的に使用されることが明らかになった。また、他の機能が命題の後にくる場合、「陳謝」表現しか現れないことがわかった。

3.2.2 学習者の場合

学習者の改善要求ストラテジーの非連続的なデータをコーディングし、それに基づいて数量化したものは図 3 の示す通りである。

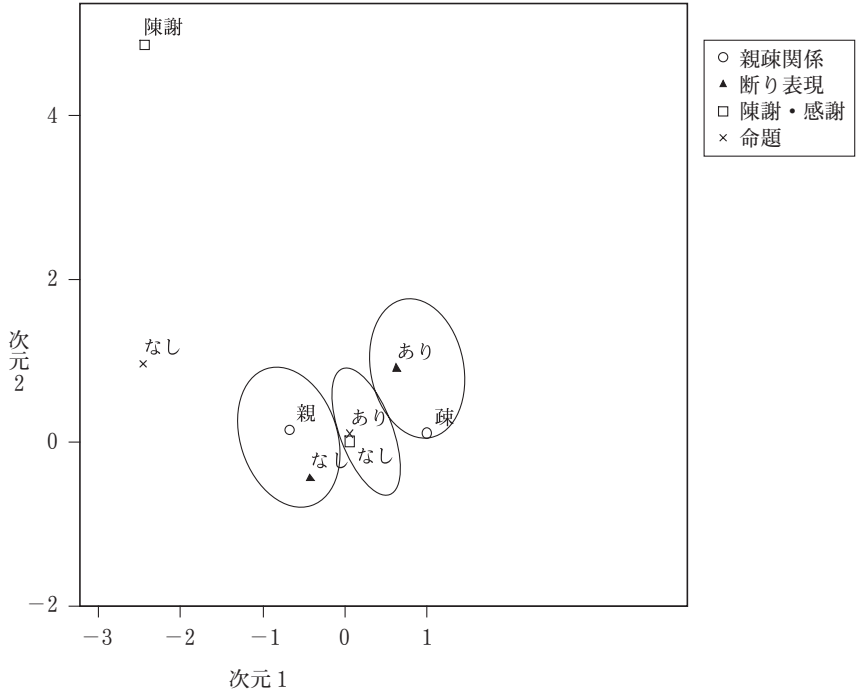


図2 発話連鎖の使用傾向（母語話者の場合）

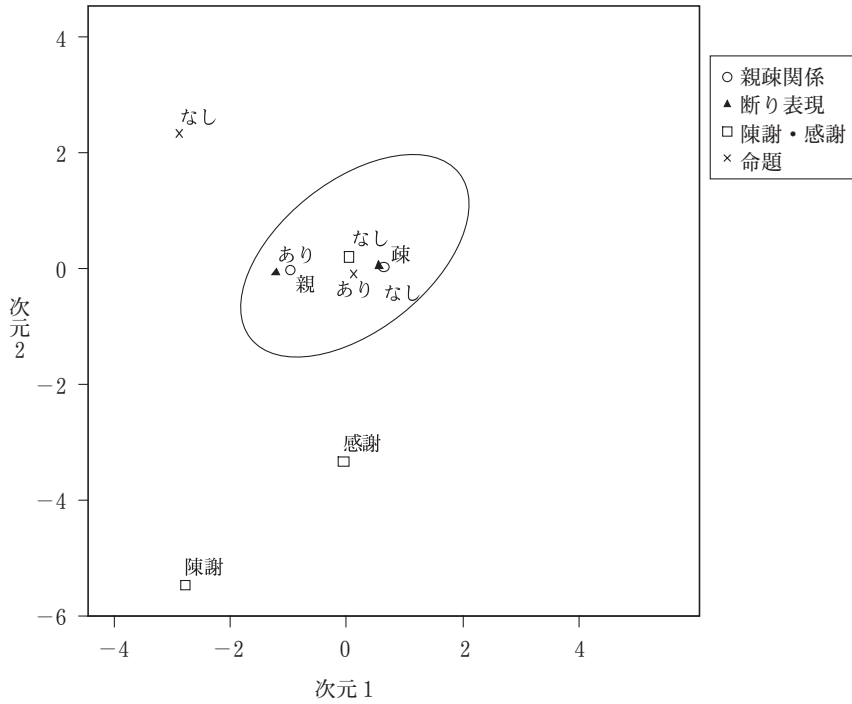


図3 発話連鎖の使用傾向（学習者の場合）

学習者の発話連鎖の傾向は以下のものである。「断り表現」使用の有無に関して、親の関係に比べ、疎の関係の方がより少ない。この点に関して、母語話者とは対照的であり、興味深い現象である。また、「命題」の不使用が極めて少なく、使用する方が一般的である。命題のあと、何かを付け加える場合、「陳謝」と「感謝」の両方とも現れることがわかった。これは、「陳謝」と「感謝」の2機能が図のプロットしている位置からも読み取れる。但し、「陳謝」は「感謝」より原点から離れていることから、「陳謝」表現は学習者があまり使用していないことが推察できる。このように、「陳謝」表現に比べ、「感謝」表現の方がより多く使う点において、学習者は母語話者と正反対である。

4. 考 察

4.1 発話の連鎖 —— 研究課題① ——

4.1.1 母語話者の場合

まず、次に掲げた母語話者の例文をみてみたい⁽⁶⁾。

- ・ごめん、今日だけちょっとしずかにしてもらってもいい？ 悪いネ。
- ・ねえ ごめん 今レポートやばいんだ 少し静かにできる？
- ・ねえ ごめん 今レポートやばいんだ 少し静かにしてもらっていいかな？
- ・お～い、もうちょい静かにしてくれ～。ごめんねえ↓。
- ・ごめん、今日だけちょっとしずかにしてもらってもいい？ 悪いネ。
- ・すみません、静かにして下さい（やさしい表現で）。
- ・すみません。少し静かにしてもらえませんか？

上記の例文のように、「ねえ」、「ごめん」、「すみません」などの呼びかけで、相手に注意を喚起し、命題の（改善要求ストラテジーの）あと、「悪いね」、「ごめんね」などの陳謝表現を用いて、相手に課する負担に対するお詫びによって発話を完結するパターンがみられた。

母語話者の不満表明ストラテジーの発話連鎖の型をパターン化にすると、次のようになる。

断り + 命題（改善要求） + 陳謝

まず、この発話連鎖の「陳謝」の部分について検討したい。陳謝表現の典型として「すみません」を挙げることができると考えられる。「すみません」の解釈について、『大辞林』（1998）では、次のように述べている。

すみません【済みません】

相手に謝るとき、礼を言うとき、依頼をするときなどに言う語。

しばしば感動詞的に用いられる。すいません。

「すみません」は相手へ謝罪・感謝・依頼の気持ちを込めて言うことばだと捉えられる。しかし、これには複数の解釈があり、どのように使い分けをしているか、また、談話上の出現位置によって、たとえば文頭と文末の「すみません」がどのような意味で使われているか、あるいは両方とも同じような機能を果たしているかを検討する必要がある。そこで、「すみません」の語用論的な用法を検討してみると、母語話者の例文に現れた「すみません」は、発話文全体の中での位置によってそれぞれ違う機能を担っていることがわかった。上記の母語話者による改善要求ストラテジーの発話文からも考察されたように、談話の最初に来る場合、「すみません」は断りの定型表現として使われやすいのに対し、談話の最後に来る場合（例：先約があるので、すみません。）、お詫びの表現として使われやすい傾向がある。つまり、談話レベル上発話文の文頭に来る場合、断り表現として機能しているのに対し、文末に来る場合、陳謝の表現として機能しているのだと考えられるのである。

4.1.2 学習者の場合

次は学習者による発話文の例文である。

- ・ ちょっと…すみませんが、しずかくださいませんか。私はレポートをします。ありがとうございます。
- ・ 皆、うるさいなァ、何のために、こんなににぎやかなァ、ちょっと小さくしてよ、ねえ、ありがとう！
- ・ 悪いけど、あなた、ちょっとしずかでくださいませんか。ありがとう～。
- ・ しずかして下さい。私はあした報告ださなければならない。しずかね、ありがとうね！
- ・ 静かに ありがとう。
- ・ ちょっと…すみませんが、しずかくださいませんか。私はレポートをします。ありがとうございます。
- ・ 皆、うるさいなあ、何のために、こんなににぎやかなあ、ちょっと小さくしてよ、ねえ、ありがとう！

上の例文からわかるように、学習者は「ちょっと」や「すみません」や「悪いけど」などの「断り表現」の使用においては、母語話者のそれとは大した差がない。しかし、命題（「改善要求ストラテジー」）のあとに、「陳謝」（すみません）ではなく「感謝」（ありがとう）がついてくるのが学習者に特有の表現であると捉えられよう。その表現をパターン化にすると次のようになる。

断り + 命題（改善要求） + 感謝

このように、学習者の発話の連鎖は、何で終わらせるかについては、母語の中国語と目標言語の日本語の違いに由来するものであろうと考えられる。この現象は語用論上の転移であろうと推測できる。この点に関して次の 4.2 節でさらに検討したい。

4.1.3 類似点及び相違点

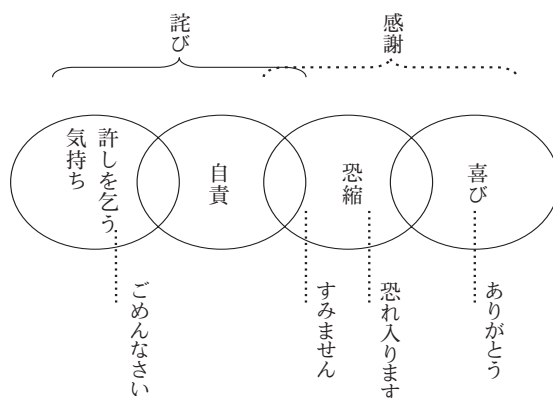
4.1.1 節と 4.1.2 節で考察したように、学習者の発話文は前置き表現や呼びかけ表現などを介して、命題に入る前、一旦「断り表現」で抑えてから、命題の改善要求ストラテジーを切り出す点においては、母語話者と共通しているといえる。一方、命題の後に続く、陳謝と感謝の使用について、母語話者は「陳謝」であるのに対し、学習者は「感謝」である点において、両者間の最大の相違が存在するといえよう。

その相違点を検討すると、学習者は発話文の前頭に来る「すみません」の前置きや呼びかけ表現の使い方を習得しており、母語話者と同じように「断り」の用法として、問題なく使えるのだと推察できる。しかし、発話文の最後に来るような「すみません」の「陳謝」の用法として、1例しか見当たらず、それと対照的に、「ありがとう」の「感謝」の表出が多い。このことから、学習者は文末の陳謝表現の「すみません」をまだ習得していないため、母語の「謝謝（ありがとう）」の影響により、このような発話の連鎖を形作ったのではないかと推測できよう。

4.2 「すみません」と「ありがとう」—— 研究課題② ——

なぜ、学習者はこのような語用論的転移を起こすのだろうか。それを、日本語の「すみません」と「ありがとう」の語用論的用法から検討したい。

佐久間（1983）は、「すみません」は相手に対する「恐縮の念」の表現であり、「ありがとう」は自己の「喜び」の表現である、と述べている。さらに、「感謝」と「詫び」の表現について、同じ感謝の表現ではあっても、「喜び」の気持ちの表明に重きが置かれる場合には、「喜び」を基底に持つ「ありがとうございます」の代わりに、「すみません」を使うことができず、「許しを乞う気持ち」を基底に持つ「ごめんなさい」は、感謝の表現として用いることができないと指摘している。このように、感謝と詫びの表現形式は話し手の心理とのかかわりによって使い分けされていると考えられる。その感謝と詫びの表現形式と、それを支えている話し手の心理との関係について、次の図4のように説明される。



出所：佐久間（1983: 63）より引用

図4 感謝と詫びの表現形式と話者の心理

図4のように、本稿で取り上げられた「ごめん(なさい)」、「すみません」などが詫びと感謝の機能を担っているのに対し、「ありがとう」が感謝の気持ちをあらわす機能しか担っていないことがわかる。そのため、改善要求のような根本的に相手に働きかけをし、自分の思うようにやってもらう場合には、喜びの「ありがとう」よりも恐縮の念の「すみません」のほうがより適切であろうと考えられる。

一方、台湾人である学習者の文化あるいは価値観の中では、相手に負担をかけることに、感謝の気持ちの表出として、「謝謝」(＝ありがとう)を言うのが礼儀だとみなされ、それをそのまま日本語に置き換え、「ありがとう」ということばを使ったのではないかと推察できる。そのため、改善要求の発話文において、学習者が相手の協力に感謝する気持ちで、文末に「ありがとう」(＝謝謝)を表出する傾向が際立ったのでありと考えられよう。

しかし、学習者の意図と裏腹に、日本語の「ありがとう」は感謝の表現でありながら、場面によって、相手に強引でやや不遜な印象を与えかねない。特に相手に何かをやってもらうように要求する場合、「ありがとう」より「すみません」の方がより適切である。従って、日本語の「すみません」は謝るときばかりでなく感謝の気持ちを表現するときにも使う、ということを学習者に理解させる必要がある。なぜなら、母語話者でも学習者でも、それぞれのやり方でコミュニケーションを行っているため、学習者にとって、目標言語の「すみません」そのものの語用論的な理解がないとミス・コミュニケーションが起きてしまい、人間関係を損なうこともなりかねないと考えられるからである。

4.3 「ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー」と「ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー」 — 研究課題③ —

ポライトネスの観点から言うと、母語話者と学習者の「陳謝」と「感謝」の使用の違いは、日本語と中国語の両言語の異なる言語表現に由来するものだと考えられる。同じ言語行動においても、相手への配慮をどのフェイス(ネガティブ・フェイスかポジティブ・フェイス)に重点を置くかによってポライトネス・ストラテジーが変わる。日本語は相手のネガティブ・フェイスに重点を置き、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーによって、相手に配慮を払うのに対し、中国語は相手のポジティブ・フェイスに重点を置き、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーによって、相手に配慮を払う傾向があると考えられる。つまり、ポライトネス・ストラテジーの使用に関して、日本語はネガティブ・ポライトネスであり、中国語はポジティブ・ポライトネスであるといえる。このポライトネス原理が働くことによって、母語話者は陳謝表現を中心に、学習者は感謝表現を中心に使うのだと説明されよう。

5. おわりに

本稿では、改善要求ストラテジーの発話連鎖について、母語話者と学習者との比較を通じ、両者の類似点及び相違点を検討した。その結果、発話文の文頭に来る「断り表現」と「命題(改善要求)」

までの連鎖は共通であるが、学習者の場合、その後続くスピーチアクトが主に「感謝」表現であるのに対し、母語話者の場合は「陳謝」表現が主である。このように、「命題（改善要求）」の後に、母語話者が「陳謝」表現を、学習者が「感謝」表現を使っているところが相違点であることが明らかになった。一方、学習者の語用論的転移が談話レベル上に現れたことが実証された。その背後に潜んでいる原理として、日本語のネガティブ・ポライトネスと中国語のポジティブ・ポライトネスに由来するものだと考えられよう。

以上の結果は本研究に限ってのことではあるが、学習者の言語運用能力に関わる問題として、有用な示唆を与えることができたと考えられる。今後は、さらにデータを増やし、本研究で得られた知見を一般化に向けて検証を進めていくと同時に、発話データに関して、自然談話をも取り入れ、分析を行うことを課題としたい。一方、改善要求の発話の連鎖について、英語などの他言語との比較をし、日本語の特徴を探りたい。

謝 辞

本研究調査の際、明海大学外国語学部史有為先生、台湾景文科技大学応用日語系葉冰瑩先生にたいへんお世話になりました。この場をお借りして御礼申し上げます。また、発話データ収集にご協力いただいた大勢の方々に感謝の意を表したいと思います。

〈注〉

- (1) Brown and Levinson (1987) によると、フェイスとは、人間の基本的欲求の一つで、社会的存在である人間ならば誰も持っている普遍的なものである。フェイスには基本的に二つの面があり、一つはネガティブ・フェイス、もう一つはポジティブ・フェイスである。前者は他者に邪魔されたり、立ち入られたくない、つまり「他者と一定の距離を置きたい」という「マイナス方向に関わる欲求」であり、後者は他者に理解されたい、好かれたい、仲間だとみられたい、つまり「他者に近づきたい」という「プラス方向への欲求」である。フェイスという用語は日本語の顔や面子とやや概念が異なるため、ここでは、そのまま「フェイス」と片仮名表記にする。
- (2) ポライトネスは「礼儀正しさ」「丁寧さ」と訳することができるが、本稿ではBrown and Levinson (前掲書)の「人はお互いのフェイスを脅かさないように、聞き手に対する話し手の配慮すべてを包含する」という意味合いで、「ポライトネス」を用いて論を進める。
- (3) 語用論的転移とは、学習者の母語の語用論の特徴で第2言語には見られない特徴が、第2言語で発話する時あるいは理解する時に現れる現象をさす(『応用言語学事典』(2003:316)参照)。
- (4) 一つの談話の中で、複数の文によって同じ意味機能を担う場合、併せて一つの機能とみて、カウントし分析する。
- (5) 本稿で提示した発話文に関して、誤字、脱字、間違いなどいっさい修正せず、調査事例そのまま掲載する。
- (6) 母語話者の例文は、非言語的な表記(パラ言語:トーンの示す記号[↓]など)を含めて、調査事例そのまま提示する。

参考文献

- 郭碧蘭 (2007) 「台湾人日本語学習者の「不満表明」について」『2007年日語教學國際會議論文集』, 223-234. 東呉大學日本語文學系, 台湾
- 小池生夫編集主幹・井出祥子・河野守夫・鈴木博・田中春美・田辺洋二・水谷修編集 (2003) 『応用言語学事典』 研究社

佐久間勝彦 (1983) 「感謝と詫び」『話しことばの表現』水谷修編 (講座日本語表現 (3)) 筑摩書房
松村明編 (1998) 『大辞林』第二版, 三省堂

Brown, P. & Levinson, S. C. (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press.